

プも送迎だったり、通所で通ったり、バスに乗ってる人もいるから、町に出ていくということが起きてるんだろうと思います。

演じること、剥がれること

藤原 今日、演劇を介護の現場でやっている菅原直樹さんが岡山の和気町から駆けつけてくださったので、ここからは彼にもご登場願いたいと思います。2年前まで東京で俳優として活動をされて、いまは岡山で介護の仕事をしていると。

菅原 東京でも介護の仕事はしてたんですけど、奥さんが岡山の田舎で暮らしたいって言ったんで、じゃあそうしかかってことで移住しました。介護の仕事はどこにもあるじゃないですか？ただ、東京から離れると演劇できなくなっちゃうよって周りの人からはよく言われました。だけど、施設で働く中で、介護と演劇は似てる場所があるなって感じていたので、そこを結びついたら岡山の田舎でも演劇活動ができるんじゃないかという予感があつたんです。

菅原 どういうワークショップですか？

菅原 先ほどみなさんがお話されたことを演技と結びつけただけですね。たとえば、認知症の方は、ぼくらからすると突拍子もないことを言ってきたりするわけですよね。その言葉を、ぼくらの価値観に合わせて押さえるのではなく、演技をすることで受け入れようっていうことです。さっき「井戸端げんき」の所長の加藤さんも「セッションする」って言葉を使われてたんですけど、まさにアドリブ、即興劇の練習ですね。

岡田 英雄さんという人がいて、すごいんですよ。「おかじい」って呼ばれてるんですけど、このワークショップで「ボケを演じる」ってことを発見して。こないだ、自分のお姉さんが入居している特別養護老人ホームに行くとボケを演じたんだそうなんです。たぶん皆さんの利用者さんたちに向けて「今日入所しましたおかじいです」って言って、ボケ老人を演じたんです(笑)。そうしたらみんなすごく盛り上がりつたって。まあ、ぼくは別にボケ老人になることをすすめてるわけじゃないんですけど、88歳のおかじいさんがボケを受け入れる演技をすることでしようなっちゃうみたいなんです。まさに映画の「カッコーの巣の上で」みたいな。伊藤 人は日常的に誰かを演じてる、と思ってる。でもボケてるおじいさんやおばあさんという時こそ、僕らのその演技が「剥がされる」んですよ。それがたまらなく面白い。

菅原 そうなんです。僕は今度、おかじいと芝居しようと思ってるんですけど、認知症俳劇演劇「よみち」にぜひ「おかじい」として2015年1月〜3月に上演された、アドリブばかりだから純粋な演技ができないんです。おかじいにならぬか物語を展開してもらいたいんで、僕は俳優という名の介護者になるんです。その時に俳優の技術ってすごく聞かれると思うんですけど、要は見せかけの演技をしてたらダメなんです。

藤原 菅原さん自身の俳優としての技術が問われるってことですか？

菅原 はい。人間と人間との関わり方ですよね。伊藤 剥き出しになる瞬間が面白いって思うのは、病院でも施設でも自信満々の介護職や看護師が、笑顔で「どうですか？」ってやってる時に、いきなりパニックで泣いてしまうことが起きて、こらえながら「やめてください、そういうことは」って思わず本心が出てくる……みたいな瞬間は、たまらなく愛おしいですね。

菅原 ボケた人とのコミュニケーションを最初から否定したり、無視してかかる職員っていうのはいるわけですよね。それに対して、ボケを受け入れる演技がある。話を合わせたり。でも失敗する時も結構あるんです。それは俳優の技術っていうよりも、人間力になっちゃうんですけどね。

「こっちは立派で正しいのか？」

鈴木 カブカブに当てはめて考えたときに若干違うのは、ボケていくんじゃなくて、知的障害がある人は「そもそもそういう人」だったりする。どういうことかという、だんだんヘンなこと言い出すんじゃないかって、そもそもやり取りしにくいことを言っている。

だから、障害福祉の現場ってとりわけ、自分の価値観が揺さぶられるような「気づき」が訪れにくいかなっていう気もしています。

この人たちは喋らない人だっていうのと同じように、こういう理屈が判らない／通じない人だっていう対応の仕方をしちゃうんだけど、僕らが当たり前に「僕ら」ってあえて言いましたけど、理屈とか言語でのやり取りがすっきりくる人たちの中で「そうじゃない人」って捉えちゃうってんだけど、なんでこっちの方にそんなに立派で正しくて揺るがないのかっていう、自分が理屈っぽいからこそ、そういうの不思議なんですよ。なんで、日頃関わっているこの人たちが「理屈の通じない」「脈絡が分からん」「なに言ってるかよく分からない」って言われて、そんなに全否定されちゃうわけ？

ただか議論くらい、いい？って、なんだか分かる

らないすごさを持つてるじゃないですか。日中、来ていただいた方なら分かると思いますが、お客さんでうちによく来てくれる人は、うちのメンバーとんだか分からないやり取りしてるんです。もはや言語とか論理ではなく、やり取りをしていて、それが心地よいと思ってる。そこに豊かなやり取りがあるのになんで僕ら理屈っぽい人が立派で、こんなに利権を持って、金も儲けられて、そんな理屈尽すってどういうことなんだって。この仕事にたまたま僕はついてしまったんで、ずっと思ってますね。

周囲の関係を変えてみると……

藤原 ところで、ちよつと踏み込んだ話になりますが、さっきの「井戸端げんき」の話にもありましたが、暴力的なことが起きちゃうこともあるわけですよね。それはその人が否定されてきたことが大きな原因なのかもしれないけど、実際に手が出ちゃったりとかもあると思うんです。そういう暴力的な衝動は実は誰にでも起こりうると思うんですけど、そういう人たちが、同じ場所を過ごせるようになっていく。それはすごいことだと思って思うんですよ。しかも「井戸端げんき」やカブカブは、他の施設では断られちゃった人たちが、一緒にいるじゃないですか。

鈴木 さっき菅原くんが言ってたように結局、人間力。そこなんだよね。使うのは、嘘でも演技でもなんでもいいと思ってるんですよ。この前「演劇センターF」2014年にスタートした演劇の拠点プロジェクトの企画で、藤原くんがその手の「嘘をつく」「虚構を演じる」と「オレオレ詐欺」がどう違うんだろうって言ってたじゃない。それは大きく違うのは、その人のことを思ってるかどうかという話で、オレオレ詐欺の場合は金のために関わってるだけじゃない？要は相手をどう思うかという話で、そこはまさに人間力。相手とどう関わりたいかというところなんだろうな。

菅原 新たに考えているワークショップで、「介護度を重く見せかける演技を教えるワークショップ」っていうのがあって。

伊藤 それね、うちの加藤くんは得意だよ！どう見ても「要支援」に見えない人を「要介護5」にしたんですよ。演技指導してね。

菅原 だからそういう演技が役に立つんじゃないかと思ってる(笑)。

伊藤 (加藤さんに)コツななんかは？

加藤 その人のことをよく知らなくちゃダメなんです。癖とかいろんな身体情報を掴んで、どのタイミングでそれが出るかという。質問の仕方も大事ですね。

鈴木 「要支援」から「要介護5」でしょ？もう段違いです。こんな話では、ヤバイですよ(同笑)。でも、そんなあやふやなもので人を輪切りにして、受けられるサービスが違ってしまうのは国の施策に大きな問題があるので、僕はいかにどうしてしまっただけでいいって思っています。役所の人もいる前ですが、苦差。介護度や障害認定区分で測れない苦しさなんていくらでもあって、障害手帳がもらえないボーダーという。知的障害ってあれの尺度IQですからね、この「時世で！」で、ギリギリで手帳がもらえない人の苦しさをちよつと想像すりや分かるじゃないですか。相当に生きがたいわけですよ。僕は、障害というの、なにかが「できる／できない」という話ではなくて、関係の中にあると思っています。障害が「重い／軽い」とかじゃなく、生きがたさがある人の生きがたさをなんとかできないものかと。その生きがたさの根源は自分にもあるので。そういうことに興味があるの。それが緩められるのであれば、もう嘘でもなんでもいいじゃないとさえ思う。

菅原 僕の演劇の入口は平田オリザさんで、僕の介護の入口は三好春樹さんという方です。三好春樹さんは「関係障害論」として、認知症のお年寄りには関係に障害があるんじゃないかってことをおっしゃってる。僕自身も人見知りだったんですよ。だけど平田オリザさんの演劇ワークショップで、電車のボックス席で知らない人に話しかけるっていうのがあるんですけど、案の定、人見知りの僕にはできなかったんです。その時にオリザさんが言ったのは「その人が頑張るんじゃないかって、言いやすい環境をつくればいいんだ」ということなんです。たとえば、僕がサッカー好きで、目の前にいる人がサッカーの雑誌を読んでいたりする。それを体験した時に、あ、僕にでも演劇できるかもしれないなって。引きこもりの人間でも、環境を変えるだけで台詞をしゃべることができるとって気づいたんですよ。

伊藤 やっぱね、場があつて初めて人間が人間になれるんだよ。ひとりでも自発的に人間があるわけじゃないんですよ。菅原 周りを変えることによって、生きやすさが生まれる。伊藤 今のこの場の雰囲気も、みなさんがいることでできあがっている。絶えずそういうことだと思えます。講演なんかでも、ふだん誰かになにかを伝えるっていう場合でも、いつも同じではなくて、話す相手や場の雰囲気によって、違う話し方が出てきていいと思います。こうでなきゃいけないって決めている人のコミュニケーションは、社会の決まり事に入っていくことをやめた僕みたいな人にとっては、苦痛ではないんですよ。共に歩み寄ることが常にあつたらいいな。

狭い社会がおかしい

鈴木 ほんと理不尽にね、許容される範囲が狭いんですよ、この世の中。特に障害なんていうとそこを訓練して克服して、立派な人間になるうみたいな教育をしちゃうんで……ほんとにね、狭いんですよ、こうあるべき人間像が。僕もそもそも「そうあるべき人間像」になれないような人間なので、でも頑張れちゃうからその中の葛藤とかイライラとかずっとならなくて……かもしれない。なんでこの人たちがこんなに頑張らせられて、「立派な人間」になって……「立派な人間」ってそんな立派なのかよ？って。

伊藤 その狭い社会の在りように対して、おかしいよなって、かなりの人が思ってるんですよ。

鈴木 そうそう。

伊藤 誰もが思っていないながらその狭さに合わせるから、統合失調診断や躁鬱診断を受ける人はますます増えてると思うんですよ。

鈴木 いや、増えるでしょう。だって世の中がおかしいんだもん。伊藤 分業しないと生きていけない状況を社会がつくってくれちゃっている。

鈴木 めちゃくちゃですよ。でもそういう世の中の大きな仕組みに対しては、僕はずっと政治学をやっていたんで、諦めたところがある。そういう仕組みだとなあって、政治を変えたいかと思わないのは、何百年もかけておかしくなってるので、僕の一生じゃ間に合わないかと思ってるからです。むしろ、生きがたさがなくなっていくような、とにかくつまらん尺度で相手を測ったりとか「立派な人間」を演じて苦しい思いをするのをやめていけるような世の中へ向けて、出会える人たちのあいだの関係をよくしていくことの方に興味があります。

藤原 伊藤さんの本(奇蹟の老所井戸端げんき物語)にも書かれていたんですけど、右肩上がりの時代はもう無理だから、落ちるんじゃないかって、降りるんだ」という考え方もありうるわけですよ。最近こういう言い方をしないのかもしれないけど、オルタナティブ？というか、別の生き方をすることです。

そこで「井戸端げんき」のキーワードがなくなって思うのは「生き直す」とどど思ってますね。それは菅原くんがいう「演じることで普段の自分が脱げる」ということにも近い気がするし、カブカブで励みさんたちが日々やっていることも「生き直す」ことの積み重ねだと思われ、そこが魅力なのかなっていう気はするんですよ。

でもさっき励みさんね、何百年もかけた社会の仕組みって言ったんですけど、そこは僕はちよつと違う意見で、人を輪切りにして要介護いくつです、みたいに数字で人間を管理する近代のシステムって、せいぜいここ100年くらいだと思ってるんですよ。だから意外と強敵でもないんじゃないか？ってというのが最近の気分です。そこでみなさんがただ抽象的・論理的にその近代的システムのゆがみを糾弾するんじゃないかって、それぞれの現場で日々活動していくなかで、周辺にいる人たちが一緒に新しい生き方を模索しているのが、すごくいいなって思うんですよ。

鈴木 そういう活動があちこちで起こっているのは、それに魅力を感じる人たちがいるからなんですよ。世にはびこっているのは、生産性とか、経済の役に立つとか国力に資するとか、つまり使える人間かという尺度なんです。その尺度でいうと老いることって、使えなくなるってことじゃないですか。障害がある人はもともと使えないって話なんです。でも「なんだその尺度は？」って思う。そんなのは戦争したいとか無駄に金を儲けたいとかいう人の中では有効な話かもしれないけど、その土俵になんで僕らまで乗せられなきゃならないんだって。もつといるんな土俵あつてもいいでしょ。僕は欲張りだから、その根っこのことまで変えたい。人間が道具であるカネにあべこべに使われるようになった「何百年」を、政治や経済じゃなくて人々の関係から覆していきたいんですよ。

熱さを増したトークは、予定の時間を超過しても一向に終わる気配もありませんでした。

紙幅の都合でこの辺までといたしますが、ちなみにこの後、井戸端げんきとカブカブの出会いきっかけとなった最前首先生にもコメントをしてもらい、●「雑」の有機的な面白さ ●ユーモアと人間らしさ ●カブカブは近未来！というような内容の話題へと話が広がっていき、カブカブに興味を持たれたら「HP」へ。

http://kapukapu.org/でも、リアルカブカブに会いにカブカブへお越しただけなのが、とにかくにもお薦めです！

「カブカブが目指している世界のこと」がわかる本、できます！

5月末完成予定

「どうやってカブカブみたいな場所が出来るの？」「そんな冒険心をお持ちのあなたにお届けするべく「カブカブのつくり方」をカブカブ所長の鈴木励みが書き下ろし、カブカブとともに歩んだ雑多で豊富な経験から、その秘伝を余すことなく伝授いたします！

また、本トークで進行役をやってくれた藤原からさんが、木更津の井戸端げんきを訪れて伊藤さんをインタビューしたのもや、カブカブ祭りでお披露目されたアレをカブカブの踊る写真真実であなただけに伝授する「How to カブカブ音頭」あえなく、本誌面からこぼれてしまったトークや関係者による奇稿、その他にも魅力的なあれこれが盛りだくさんですよ！

とっても豪華な執筆陣!!

◎カブカブ祭りのトークに飛び入りで登場願った、岡山で「老いと演劇OibakeShi」を主宰する菅原直樹さん

◎2012年からカブカブから動かすワークショップをお願いしている作家の新井英夫さん

◎おなじく絵画ワークショップでお世話になっている絵本作家のミロコマチコさん

◎カブカブの運営委員長も務められた和光大学名誉教授の最前首先生

最新作「写訳春と修羅も大好評の齋藤陽道さんの写真、カブカブの絵もたっぷり、デザインは阿部太一さん(GOKIGEN)、編集は大谷薫子さん(モクシユラ)。B5・56ページ(予定)というボリュームで観覧作成中ですよ！

お取り寄せに関するご質問など、お問い合わせはカブカブ(045-953-6666鈴木)または <http://kapukapu.org/hikarigoka/m/p/>

「あさひふれあい助成金」の助成を受けてこのイベントは実施され、この印刷物も作成されました